制度疲労の解決策は　岸田首相は原稿捨てよ

＝藻谷浩介・日本総合研究所主席研究員毎日新聞 2024/2/25　東京朝刊有料記事

東京で 10 日前、はや春一番が吹いた。満開の梅の横で桜が 3 分咲きになった場所もある。寒さは戻ったが 2 月にこれでは、夏はどれほど暑くなるか。

そんな中、岸田文雄政権の人気は冷え切っている。**彼らは何を間違ったのか。**

上場企業や金融投資家は空前の株価高騰に不満はなかろう。**高級官僚も操縦しやすい今の体制を歓迎**しているはずだ。外交の玄人筋も、**韓国と協調**に転じ、**中国とも表立っては争わず**、大国の利害が錯綜（さくそう）する**ウクライナやパレスチナ問題では微妙なバランスで立ち回る姿勢を評価**しておかしくない。筆者も、**排外感情をあおったり、官僚人事に手を突っ込んだりしない姿勢には喝采**したい気分だ。

他方で筆者は、**安倍政権に始まる内政面の幾つかの愚策の、漫然とした踏襲に強い不満**を持つ。**国の経済価値を下げるだけの円安**と**輸入物価高の是認**。無用で無理筋の**原発再稼働**。**津波リスクを無視した辺野古移設**。**少子化対策に新たな国民負担**を求めつつ、額ありきの**防衛費増額**。**鉄道の「上下分離」**に揮発油税を投入しないガラパゴス的頑迷。**森友問題の隠蔽を撤回しない姿勢**。列挙し出せばきりがない。

とはいえ、足元の支持率の低下は、そのような各論が理由ではないだろう。先日会話をした、ある一市民は言っていた。「首相の答弁は原稿を読んでいるだけで、まるで人工知能が応答しているみたい。問題自体を認識できているのやら」「**まったく新しい誰かが、制度疲労が極まった仕組みを、丸ごとぶっ壊して**くれないものか」と。

制度疲労とは必然性を失った仕組みを墨守し抜本的改善から逃げる態度の蔓延（まんえん）を指すのだろう。企業なら解体や倒産にも至る病だが、政府の解体や財政破綻は皆が困る。だから**リーダーに何とかしてほしいと、国民の多くが本気で感じ始めている**のではないか。

国会質疑を目にするたび、一昨年の NHK 大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」を思い出す。大江広元の書いた原稿を読み始めた北条政子が、途中から自分の言葉で語り出し、それに奮い立った北条泰時など若い御家人の発言で、鎌倉武士の結束が固まったシーンだ。その脚本の裏にあった思いは今の政治家や官僚たちには伝わらなかったらしい。

ある若者も言っていた。「政治家の原稿の棒読みに、何の意味があるのか」と。筆者は答えた。「50 年前の小学生の頃から、私も同じことを思っていたよ」と。すると彼はつぶやいた。「50 年後にもまだこういう儀式をやっているのかな。その前に、日本は終わってしまうかも」

裏で決めた方針を「ていねいにご説明してまいる」のでは誰の心も動かない。**衆人環視の場で、本音で問いかけ合う中から、結論が肚（はら）に落ちる、賛成はできずとも得心はする瞬間が訪れる**のだ。国会質疑の役割をそう変えない限り、国民の納得は得られない。そのためには党議拘束は緩め、事実誤認の補正のための前言撤回は赦（ゆる）し、「ご飯論法」も、言葉尻での揚げ足取りもやめねばならない。

旧弊が通じないのは、政治資金問題も同じだ。議員も政治評論家も「使途をすべて公開することは現実的ではない」というが「政治家は領収書なき支出を許される存在だ」という方が、もはや現実的ではない。**政治家も民間人と同じく、すべての収入を課税対象とし、領収書なき経費支出は認めない**ことだ。まじめに資金管理をしている政治家にとっては損にならない。税務当局や検察が政治に介

入する恐れを言うのなら、**民間の言論人はとっくにその危険と対峙（たいじ）しつつ、隙（すき）を見せずに闘って**いる。

　首相や官房長官がほんの少しだけ、話し方や話す際の表情、目の動きを変えるだけでも、変化は始まる。与野党とも論理ではなく**感情での攻撃には言葉を重ねて徹底的に戦い**返そう。**一部だけを切り取った報道にはフル収録の動画をネットに**上げて抗議しよう。下書きのない論戦なら、若い世代の関心は必ず得られる。

　政治報道もそろそろ、**単なる政局解説を脱する時期**だ。政権がいつまで続くのかが本質的な問題ではない。制度疲労がいつまで放置されるのか、誰がそこにメスを入れられるのか。有権者の静かな関心は、そこに向いているのだから。＝毎週日曜日に掲載